

令和6年度 第5回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会議事要旨

日時 令和7年1月29日(水) 13:30~17:10

場所 かながわ県民センター11階コミカレ講義室2

■ 開会

(かながわ県民活動サポートセンター副所長から本日の予定を説明)

- 委員8名での開催
- 会議の流れを説明
- 13時30分~14時20分 プレゼンテーション審査前の事前確認
- 14時30分~15時35分 令和7年度実施分 ボランティア活動補助金(継続)のプレゼン審査
- 15時45分~17時00分 プレゼン審査に対する選考
- 17時00分~17時05分 令和7年度実施分 協働事業負担金(継続・新規)の協議調整状況の報告
- 17時10分 閉会

(審査会長より開会の宣言)

- 令和6年度第5回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会を開会する。
- 本日の会議は、率直な意見交換の場を確保し、公平な審査をする必要があるため、神奈川県情報公開条例第25条第1項第1号に該当し、非公開とする。
ただし、プレゼンテーション審査は公開とする。

■ 審議事項 令和7年度実施分 ボランティア活動補助金(継続事業)の協議対象事業選考

(基金事業課長から以下について説明)

- ボランティア活動補助金(継続・新規)事業分野別申請状況(資料1)
- 来年度のボランティア活動補助金(継続・新規)の予算要求額(資料2)
- 審査委員と利害関係のある団体からの提案なし
- 事務局からプレゼン審査対象団体の提案概要及び幹事会での事前調査結果について報告(資料3)

(委員による審議)

- ボランティア活動補助金(継続)の提案事業に係るプレゼンテーション審査における確認事項等について検討した。

(プレゼンテーション審査の実施)

- ボランティア活動補助金(継続)の提案事業に対するプレゼンテーション審査を次の

とおりに行った。なお、傍聴はなし。

【学習障害やその周辺の子どもたちのための「デジタル副教材（漢字編）の開発・普及】

特定非営利活動法人 不登校・発達支援ネットワーク Seeds APP（以下「Seeds APP」という。）によるプレゼンテーションを実施。

<質疑>

（為崎委員）

今、それぞれの事業の成果について発表があったが、改めて、学び方広場、それから教材の現状と目指す方向性を伺いたい。

まず、学び方広場を今年度スタートさせたということだが、現状でどのような方がどのような利用をされているのか、あるいはどのような投稿があり、どのような効果を感じられているかという部分と、今後、学び方広場の目指す方向性として、双方向のコミュニケーションや利用者同士の交流などを目指していくのか、などについて聞きたい。

（Seeds APP）

学び方広場は、漢字の学び方を応募してもらって、採用して、参加型教材というツールとして使っていくというのがスタートだった。どんどん応募が来るかということ、そういうわけでもなく、内輪の口コミで広まって、集まってきているのが正直なところ。

この教材が今、500字程度だったとして、きちっと1016字が整ったときは、もっと多くの方に認知され、この教材を使いながら学び方広場にも投稿してくださると考えている。

Q&Aを整えているが、実際にQ（質問）がきているわけではない。私たちの日ごろの活動の中で質問が来た内容からQ（質問）をあげる。そして、研究してA（アンサー）を出している。

いずれは、相互の交流の中でいろいろな意見が出ると嬉しいと思っている。

（為崎委員）

デジタル副教材については、どのような利用のされ方、どのような反応、実際に子供や保護者、指導している方から意見があったか。

（Seeds APP）

どんどん使えるよという声が上がってくれば嬉しいが、そうではなくて、スタッフがいて、子どもとオンラインで繋いでやったりもしているが、第一声が、面白いけど、ということで、中々、まだ使えているという段階ではないというのが正直な声である。

（為崎委員）

両方とも、なかなか利用する人からの声が得にくい状況のようだが、今後それぞれの事業

の効果はどう測定し、改善にどう結びつけるかというところが課題であると思う。広く利用してもらい必要があるが、一方で匿名性が必要にもなる。そのあたり難しいと思うが、今後、効果をどのように検証して、どう改善していくのか。

(Seeds APP)

確約をしっかりともらったわけではないが、鎌倉市で不登校特例校、いわゆる学びの多様な学校というのが開校される。不登校の一要因として、その学びづらさがあるって、漢字もその1つであるということで、その教材を学校でも使ってみようという声を、教育委員会の先生からもらっている。そこで使っていただいて、生の声を聴いて改善していけたらと考えている。

(為崎委員)

多分、今の話だと、学校の先生が使うという観点からの改善になると思う。実際には、デジタル副教材は子どもだけで使う、指導者が教える、それから大人と子どもと一緒に使うという3つの場面が想定されているが、それぞれの場面に十分な対応になっているというふうを考えているのか。

(Seeds APP)

実際には、漢字を自分が編み出して、面白い漢字の覚え方ができたよということで、学習が苦手と思う子どもたちには面白い覚え方をして漢字が好きになったよというのがねらいだが、学習が苦手と思う子どもたちには主体的にやるということには至らないので、やはり背中を押したりというのがメインの形になっているかと思う。

(為崎委員)

子どもが使うにあたって、ルビを振る必要があるのではないかという意見も上がっている。そのあたりの、使い勝手の改善というようなことは考えているのか。

(Seeds APP)

確かに、漢字の読みがないところも一人では難しいので、私たちの開発の余力ができれば整備していきたい。

(為崎委員)

鎌倉市とは綿密な連携を図れていて、おそらくそこでモデルを構築されていくのだと思うが、その構築されたモデルを今後、神奈川県内に水平展開するにあたって、どのようなイメージを持っているか。

(Seeds APP)

実際にあった今年に入ってから例だが、藤沢市の大きな小学校で、鎌倉市の事例を校長

先生に話した。

全校生徒は1,250名いるが、校長がその場で、全校に配りたいということで、すぐに送ったということがあった。

一つ一つの成功事例を積み上げ、よい声があれば、どんどん照会するという形で水平展開していきたい。

(為崎委員)

水平展開していく中で、自分たちも同様の取組みをしたいという声があれば、ノウハウを提供しつつ、立ち上げのバックアップもしていくという、理解でよいか。

(Seeds APP)

機会をいただければ、あればそのようにしたい。

(為崎委員)

次年度が補助金の交付最終年度になるが、自立化についてはどのように考えているのか。組織の基盤体制や財政面について、補助金終了後に向け、どのような道筋を描いているか聞かせてほしい。

(Seeds APP)

500字、常用漢字の1026字の半分を補助金事業ではやることとなり、それで終了となる。その後に関しては、寄付金や他の助成金、クラウドファンディングなど、色々なチャンネルを模索して、最適なものあるいは複数を採択していけたらいいと思う。

(石田委員)

学習障害やその周辺の子どもたちのためのデジタル副教材とあるが、勉強の苦手、漢字が不得意な子も含めて、学習障害と呼んでいるのか。それとも、いわゆる発達障害の一つとしての学習障害の子どもたちを指しているのか。

(Seeds APP)

きっかけは、私たちの教室に来た、学びづらさを持っているいわゆるADLと認定された子どもたちがきっかけではあったが、例えばこの教材が、学習障害の子どもたちのための教材だという打ち出し方だと、かえって届きづらいことが分かった。そうであるならば、学習障害であろうがなかろうがというふうに出していきたい。それが結果的には学習障害の子どもであっても、楽しく漢字が覚えられるなど、そういった成功体験につなげていってもらえたらよい。

(石田委員)

学習障害の子どもたちだけではないということか。

(Seeds APP)

そうである。

(石田委員)

ディスレクシアが24万人(全国)、神奈川県でいうと2万人弱になろうと思うが、神奈川県下だけでも、それだけの小中学生で読み書きができない子どもがいる中で、そういったものを作って普及させていくというのは非常にありがたいことだと思うが、今までやって来た中で、成果や効果、反応があれば教えていただきたい。

(Seeds APP)

これが絶対正解だということ子どもたちに提示するのは難しいと思っている。それぞれにあった、いろいろな学び方があっていいよ、というメッセージがまず必要なのかなと思う。

自分に合った学び方というのも人それぞれだと思うので、そんなところがメッセージとして届いていけばよい。

漢字もそうだし、それに限らず算数なんかにおいても届けていきたいと思っている。

(石田委員)

鎌倉市にある小学校の全児童に配布されたというリーフレットは、いつからいつまで配布されて、効果、反応はどういったものがあつたのか。

(Seeds APP)

7月、8月に集中的に配布した。その後は、教材の作成でいったん普及は止まったのだが、鎌倉市以外の藤沢市にも回りつつある。

先生方は、面白いね、よく考えたね、と言ってくれているが、子どもからの反応についてはヒアリングができていない。

【木質バイオマスを活用した地域内エコシステム構築事業】

特定非営利活動法人 侘（以下「侘」という。）によるプレゼンテーションを実施。

<質疑>

(尹委員)

事業1について、健楽の湯の関連の課題については、一貫して大きな改善が見られないように思う。ボイラー配管の接続の問題や、オペレーション上の問題がある、との記載があるが、前年度に提出された事業計画書でも全く同じ表記がある。

ここが解決しなければ、事業1がこれ以上目標どおりにいくことはないのでは、と受け止めている。先ほどのプレゼンのご説明でもあつたが、元々の供給量の変更があり、その変更した供給量にも、現状至っていない。この部分については団体としてどうすればできると考

えているか。

例えば、町にこういうことを働きかけたいとか、皆さんの中でこういうことができる、というようなことはあるとしたらどんなことか。

()

町にはプッシュをしている。協議の場もたびたび作っている。年度末までにもう一度、もう少し突っ込んだ内容での協議を図らせていただきたいという打診をしているところで、諸々努力は重ねてきている。

コロナによる営業時間の変更については、変更してもらってある程度元に戻った。週6日だったものが週5日になったが、まだ1日、月曜日と火曜日もお休みしてもらおうというようなことで、その分は改善されていない。

機械と灯油ボイラーの課題については、接続の関係がかなり複雑なようで、色々な業者に来てもらい、色々と説明してきたが、まだできていないというのが実態。ただ、月に2回、今日の朝も薪を運んだが、改善は確実に見えている。来年度さらに交渉するつもりだが、それで、ある程度目標は達成できると思っている。

(委員)

今おっしゃった目標というのは、60 m³の方か。どういう点で改善がみられているのか。

()

そうである。昨年度は30~35 m³くらいまでしかいかなかったが、今回は、現時点で45 m³まで行っているし、それから年度末にはもう少し上がるのではということで、薪を購入してもらう需要の方が確実に増えているということ。

(委員)

本年度は、山梨から専門家に来てもらってボイラーの状況を見てもらったとあるが、そのボイラーの持ち主は松田町でもある。そういう形で運営しているのに、団体内で専門家を呼ぶ形になっているのは何か理由があるのか。本来であれば、町がオペレーション等、主体的になって動く話なのではないかと思うが。

()

説明不足だったが、実際にやっているのは、町の社会福祉協議会が施設管理者としてやっている。ただ、彼らが十分に薪ボイラーの技術を完全に把握しているわけではないので、我々がそれをアレンジメントしながら、町の社協、町の水道課と で3者協定を持ちながらやっており、実際は町の方でやっている。

(委員)

来年度の収支予算書について、収入の部分で、ボランティア活動補助金が150万円、支出

について、人件費が142万円あまりあり、読みようによっては、補助金のすべてが人件費に賄われているとも読める。補助金の終了後、人件費の部分については、団体が単体で担保できるのかと少し危惧しているが、この点についてはいかがか。

()

人件費については、確実に払えるかどうか、現時点でも確実に関与している人間には払うようにはしている。これはなんとしても確保したい。新たな事業も考えているので、そこも含めて回していきたい。

(委員)

新たな事業とは広葉樹の関連で精油を作るなどの部分か？

()

そうである。

(委員)

これに関連して、その精油をつくるための設備投資、例えば2025年でできるのか。事業1・2が完全に回りきっていないという現状を踏まえたうえで、新しいことができるのかということについてどのように考えているか教えていただきたい。

()

神奈川県には、「もり・みず市民事業支援補助金」というものがある。それに今回申請をしている。

さらに、こういった新しい事業と一緒にやってくれる人たちは、必ずしも、人件費というよりも、有償ボランティアもしくは、ボランティアという形で、これまでかかわった方、スキルや見識をお持ちの方、時間にゆとりを持った方そういった方を巻き込んでいくための森林再生プログラムなどを新規で作っていったり、こういったところに興味をひきつけて。NPO が行っている事業全般にに興味を持ってもらえる人たちを集めて、そういった方の力を結集して、新規事業にチャレンジしながら、これまでの事業の問題点も含めて、包括的にクリアしていきたい。

(委員)

マンパワー不足は解消されつつあるとのことだが、実際作業に従事するスタッフが確保できていない、事業1の話もそうだが、事業2についても目標には少し届かなさそうという記載がある。

事務局が実質1人体制で、町との調整、あるいは事業1・2を含め、川上・川下の状況把握や全体のオペレーションをやっていく、そこの担い手の部分について問題はないのか。

あるいは、もし、そうでないとするならば、それに対して何か対応や考えがあれば聞かせ

ほしい。

(仿)

事務局1人といったが、バイオマスの針葉樹の部門、広葉樹の部門、地域おこし的な部分の部門と、それぞれの事業部門で担っている幹事がそれぞれおり、頻繁に協議を重ねて進めているところ。

指摘のあった広葉樹の不足がどのように起きているかということ、やはり機器の扱いはリスクが高く、そのパワーワークに従事できる者というのは、単なるファンとして携わっているというよりはもう少し活動に突っ込んで参加したいという方々へ育成していくというフェーズを、今一生懸命積み重ねているところで、それがなるべく自分自身や事業を始めた者にとどまることなく、関わり手が層をなして、ピラミッドを構築していけるように今頑張っているところである。

(山岡委員)

広葉樹の川上の部分を担える人材が確保できれば、川下のほうは需要があるので、少なくとも事業2については、初期の目標を達成できるという理解でよいか。

(仿)

そのように見通している。アウトプットの方を自信をもって広げていきたいが、インプットの方でそういったわだかまりがあるので、そこをクリアしていきながらアウトプットの方を広げていくということに繋がっていくものだろうと想定している。

【政令市を含む神奈川県内の認知症支援基盤の強化を図る事業】

一般社団法人神奈川オレンジネットワーク（以下「オレンジネットワーク」という。）によるプレゼンテーションを実施。

<質疑>

(峯尾委員)

資料にもあるが、認知症の支援活動実践報告会、それからカフェ学会はこれからだと思うが、いずれも昨年からやられたとのことで、団体としての活動期間は短いですが、実際に今年やってきて見えてきた課題のようなものがあれば教えてほしい。

(オレンジネットワーク)

カフェ学会は、広報期間を設けて公募しているが、中々かそこに手をあげる団体は少ない。学会の周知が開催通知と共に届くので、公募が手前で順番が逆になってしまう。これはまだ会が新しいということもあるし、開催知名度やHPの閲覧が多くないということでもあると思う。

地域で実際にどれくらいの活動が行われているのを実際把握するのは非常に困難。県の認

知症学会の人がゴルフと一緒にいてこうというグループがあったとして、そういった地域の中で見えない形で存在する地域活動がある。そういったものが増えていくことが大事だと思っているが、それらをあぶりだしていくことは難しいということ課題として持っている。

(峯尾委員)

参加の周知やエントリーのこともあるが、その前の説明に、オレンジネットワークが政令指定都市等を中心に情報が全てメールで一斉に流れているということか。

(オレンジネットワーク)

そうである。

(峯尾委員)

そこから実践者にはどうつながるのか。

(オレンジネットワーク)

願いはしているが、地域包括支援センターがどこまでどう流してくれるのかというところはこれから。

活動には地域包括支援センターの担当者が多く申し込みをしているので、いずれ周知が行き届くかと。大事なのは、地域の小さな実践を報告するということの方が、包括支援センターからの地域の人たちへの情報提供もしやすくなるのではないかと思う。

(峯尾委員)

そもそもになるが、この事業の目的が「県内の認知症支援基盤の強化」とある。

具体的はどのような姿、形が現れたらよいと考えるか。

(オレンジネットワーク)

事業計画にタイトルとしてこの言葉を大きく打ち出しているが、1番は、身近な地域で認知症の人をサポートする取り組みが広がっていく、あるいはそれらが組織として活動基盤を強化するような動きにつながっていく。そういったことで、ネットワークがいずれつながっていく。ネットワークをすぐに構築するという段階には、今ない。

(峯尾委員)

ネットワークとは何を指すのか。

(オレンジネットワーク)

人のつながりだと思う。

(峯尾委員)

人とのつながりは目に見えないが、団体として集まるのは3つの事業だけではなく、おそらく定例会だとか、オンラインにしても、フェイストゥフェイスになっていくような仕組みや活動はこれ以外にやっているか。

(オレンジネットワーク)

オンライン会議を試みたが、あまり参加がなく残念だった。

今年は、理事会で承認を受けて動き出す話ではあるが、会員同士の親睦と交流を図るような大きな講演会、シンポジウムのようなものを会場で行うことについて検討している。

(峯尾委員)

全県を網羅した計画になっているので、難しい部分もあると思うが、例えば、県西や湘南など地区割りの中の連絡会議等もネットワークになると思うが、そういう構想はないか。

(オレンジネットワーク)

私のつながりだけで行くとそういうことはできるが、他の理事のつながり、川崎市や相模原市の参加している人たちのマンパワーが充実していないと感じているので、まだそこまでは聞けていないだろうと思う。ただ、役員のほかに事務局担当が8名おり、地域ごとに割り振られている。そのため、そのような形を模索していくことになると思う。

(中島会長)

2年目の提案も1年目と同じ計画になっていると思うが、事業1～3それぞれの成果を掲げていただいている。「認知症当事者、家族の安心した暮らしが実現する」、「地域支援基盤強化を図る」、「新たなチャレンジが生まれる下地を作る」。

それぞれの活動、成果がそれぞれの事業にどのように結びつくのか。効果を測定したり、そのつながりを確認したり、どのように取り組んでいるのか。

(オレンジネットワーク)

事業ごとにアンケートを行っている。主催が神奈川県のものについては県がアンケートを取っているが、それ以外の活動については毎回我々がアンケートを取っており、大変評価は高い。

これらの事業がこの会の目的にどこまで到達しているかという評価については、現状は事業の参加者数、数字で評価するしかない。

(中島会長)

参加者の主観、アンケートの回答が、今、言った成果に結びつくというのはどのように把握されているのか。

(オレンジネットワーク)

事業の成否をアンケートで聞くことにしている。それによって事業の方向性を、これでもいいのか等検討する。

(中島会長)

今度、認知症カフェ自体が神奈川県下 311 ぐらいあって、参加者が今 60 人ぐらいだということだが、これは次年度以降、今年度の経験を含めて何か増やす方策は考えているか。

(オレンジネットワーク)

前年度はオンラインだったが、今年度はこういった抄録集をすべて認知症カフェに郵送した。実際にそれを見ていただいて、どんな発表があるかを分かっただけで参加していただくことになっている。

大会参加に申込してくれた人に送るものについては、最近は PDF が多いが、あえて抄録集を送っている。

【持続可能な障害者スポーツ活動のための人材育成と理解促進事業】

特定非営利活動法人 Fun Place 39（以下「Fun Place 39」という。）によるプレゼンテーションを実施。

<質疑>

(高村委員)

今年度の事業計画は予定通り進んでいると思われるが、その中で、2 人の方が認定される予定であるということ、それから、既に予定通り 5 人の方が在籍しているということだが、毎回、欠席があるようなところもあり、実際この第 3 四半期やってみて、指導者の指導力や経験のバランス、そういったところでも課題はあったのか。

また、それを踏まえて後期に生かしていることや、次年度に向けての課題でカリキュラムに反映させているようなことがあれば教えてほしい。

(Fun Place39)

参加申込者が 5 名おり、現在 4 名が認定試験を受けていて、認定が受けられるのではないかと予測している。1 名の方は、申込んでみたがスケジュールが合わず、そのような状況だが申込んでも良いかという方だった。熱意をもって申込み方も多いが、ご家庭の状況等、参加者の理由で参加できないという方もいる。定期的に参加する 4 名は、熱意をもってくれるメンバー。やったからこそ、そういう方と 1 人ずつでもつながったということは、感動しながらやらせていただいている現状。

(高村委員)

毎回交代で誰かが休んでいるわけではなく、1 名の方が、という事業はよくわかった。

意地悪な質問だが、初年度の計画では、講座は全 18 回だったと思うが、報告は 15 回となっている。来年度の計画も 20 回くらいとあるが、19 回となっているが、これが受講の予算にも反映されていないようであるので、このあたり、全体のカリキュラムのバランス、今年受けた人と来年受ける人の内容の違いなど、どのように計画に沿っているのか。

(Fun Place39)

初めて検定という形を作らせていただいて、この計画を作りながら、その点はすごく感じているところ。18 回が 15 回になったのは、公共施設の利用なので、施設の都合でキャンセルせざるを得なかったということ。実際は、別の活動の中に一緒に参加してもらったり、参加者に対してしっかり指導は行き届いたかなと思っている。

1 年目やってみたからこそ、新しくまだまだ広がるのではという期待も込めて、プールの外に出る活動をしていきたい。

(高村委員)

今の話だと、公共施設を使えなかった分、回数として何か取り組んでいることがあれば、ちゃんと報告にあげたほうがよいと思う。

続いて、今年度少し計画を変更して、法人認定制度を前倒ししたということだが、事業計画のどの部分に反映されているのか教えていただきたい。

前倒ししたことで、2 年目はどのように変わってくるのか。

(Fun Place39)

3 年を通して事業計画を想定した計画にしたが、1 年ごとに目標をしっかりと設定してやりたいと思っていた。1 年目はとにかく、初めてだったので、どこまでできるかわからないが頑張ってみようという中で、やってみたところ、参加者の熱意や思い、一緒にやってきたメンバーたちの思いが重なって、認定までしっかりと形を作ることができた。

(高村委員)

予算について、新たに変更したところで、実際に課題として事務作業が思ったよりも多かったと書かれており、そうなのだと納得したが、これは次年度の計画や予算にも組み込まれていないように思うが、この点はどのように対応を考えているか。

(Fun Place39)

経理も初めてで勉強したことで文言が変わったと思うが、人件費の中に入れさせていただいた。

スタッフ給与のところに、事務作業員が 1 名追加になっている。現場の指導員の人数だけを計上していたところを、事務職員のスタッフを追加した。

(高村委員)

承知した。

予算を見ると、3か年のところで受講利用者の会費が増えているが、その分、自己負担金はだいぶ下がっている。そのあたりは何か自分たちで本体から負担してもう少し組織基盤を増やしているというような計画はないのか。減らした理由を教えてください。

(Fun Place39)

記載の仕方も関係すると思うが、当初から参加者の負担金はいただいている。受益者負担がなければ、一般的に皆さんスポーツをする機会を同等にしてというところで、イメージのために利用者からはいただいていた。

(高村委員)

元々は40何万円という利用者負担に対して、20万円とか30万円の負担を法人から出すという計画になっていて、補助金の金額もそれに合わせて増やしていたと思うが、負担金を減らしていたので、どうしてなのかと思い聞いた。

(田中委員)

具体的な成果で、他とのネットワーク構築に手ごたえを感じているとあったが、県内の団体だとか、障害児、障害児のスポーツ団体など、そういったところがあるのか、具体的な手ごたえを教えてください。

(Fun Place39)

神奈川県補助金事業ということで参加者の募集をかけ、近隣地域、横須賀の行政やいろいろなところにチラシを配布させていただいて、活動を再開した。

その中で、市の公共施設を使ってやったことで、応援して下さる行政の方も増え、横のつながりも増えた。その実績として、11月に当法人の自主事業として、初めてインクルーシブ水泳記録会というものをやらせていただいた。

全国的にも少しずつインクルーシブ記録会というものはやっていたが、横須賀市では初めてのことで、中々できなかったが、地域の企業の協力もいただきながらやった。

県内ということであれば、施設の都合上、初めてのイベントだったため、半日しか利用ができなかったが、横須賀限定で100名の参加者を募集して、それに対してサポーター・ボランティアスタッフの方も100名以上、逆にサポーターの方のニーズが多く、たくさんの方に手伝いいただくことができた。

その中に、近隣の同じ障害福祉団体だったり、行政だったり、スポーツ課さんだったり、横浜、神奈川の水泳に関わる連盟の方とか、たくさんの方が参加いただいて、色々私たちも教わりながら今に至っている。

(田中委員)

毎年最大5名の人材が育成されていくと思うが、その人材が、皆さんの法人で認定されたあと、他のところでも活躍をというお話があったかと思う。具体的な想定があるようであれば教えてほしい。

(Fun Place39)

横須賀市の施設を使っているので、横須賀から参加する人が多いと思ったが、参加者の中には、神奈川県内、横浜や川崎からの参加者も多かった。そういった中で、当法人で採用を予定しているうちのメンバー2名も、横浜のメンバーである。

それ以外のうちで活動する、さらに、協力団体、県の水泳連盟だったり、横浜市の水泳連盟のpara部門の現地に行くというような部署に配属できるようなところまで話が行っている状態である。

(委員による審議)

- ボランティア活動補助金事業(継続)の提案事業に係る公開プレゼンテーション審査の結果を踏まえて審議を行い、事業を選考した。
 - ※ 選考結果は後日団体に通知。

■ 報告事項 令和7年度実施分 協働事業負担金の調整状況

- 令和7年度実施分 協働事業負担金(継続・新規)協議調整状況の調整状況について、事務局から報告。(資料4)

■ 閉会

(審査会長より閉会の宣言)

- 令和6年度第5回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会を閉会する。

(以上)